日本歳時記

五

839
7
87

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

839
7
87

日本歳時記 七八九月 五

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

日本歳時記巻之五

秋

漢書律暦志ニいはく秋ハ揪斂ス萬物ヲ也ト
又いはく陰気ハ始テ凝ル也ト
礼記ニいはく秋ハ陰ノ気ハ始テ殺ス也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク厳シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク粛シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク清シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク冷シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク寒シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク枯シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク落シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク収シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク蔵シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク閉シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク塞シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク深シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク厚シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク重シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク静シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク定シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク止シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク終シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク尽シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク滅シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク消シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク亡シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク死シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク絶シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク滅シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク消シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク亡シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク死シ也ト
又いはく秋ハ陰ノ気ハ漸ク絶シ也ト

曽山文庫
根岸信輔氏寄贈

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

糞せむもうるさくやうるさくや
小児たちやくやよ
摂生論よいそく妹乃書
衣服之事を云
金匱要畧よいそく秋九十日禽獣の肺を食ふ
書東垣ややくく古人の云秋蔓と含まれ人をし
玄氣と濁女心勝居後綠みを又秋蔓六人の
天年を天ふといふ硯行
ややく蔓と含へき毒よりて
筋力と減す

七月 立秋ハ七月の節の暑ハ
凉風 律と爽明とて
ゆふをつきといふを時せり

七日 沐浴

七日 七夕と云又墨処ともいふ
七月七日織女牽牛車乗渡河
五雑組ニ元微之織女牽牛の事綴河漢記ニ好事の
ゟ妄言とわけ惣拠無
き婦人女の作く巧ある可
墨子ニ帝堯天上乃列宿とて汚蠕を
彼くむちを赤なやくむくと

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

せり 蕗の薹 ふき 独活 うど と云つ而一ツ事如くやまと書
ゐ久しくをまとめて書ゐるやうなれども一ツ一ツ事の
別なるゆゑ一ツ一ツ事の料を挙げて書ゐるなり又
此事なるゆゑ一ツ一ツ事にこれといふ事
なきもの多し 雑等の料を挙げて書ゐるなり又
此事ゆゑ一ツ一ツ事にこれといふ事
二重あるゆゑ一ツ一ツ事に挙げて
酒 洗ふ 菊 と云ふ事なり

七夕乞巧奠 集よりの名ひろひ一ツ事

なり 水引 芋の葉風みなひくゆゑ一ツ事

古今集 元 河内躬恒

年ごとに 宝 七夕 ぬるよのなき 雨 降る

また 露 葉 無風

七夕 乞巧奠 ともいふ 天子 七夕の年 一度 会

織姫星 牽牛星 天の川 両方 天

新 粉 集 て 菓子 両方 天

いく秋 と 綾 ぬ ら ん 七夕 の 糸 よ り

新後撰集よ　弓治朝臣

まれに行かをあふぐ七夕の

七夕の名は杜牧

雲落月低一鉤色　誰抵経年別恨多　最怕明朝

洗車雨　不教回脚渡天河

又　晁補之

重幃深下莫愁寒　銀漢迢迢暗度難

蛛網尚残三五月　鵲橋已渡千万人

又

織女牽牛隻扇風　年年一度会河東

人間甚事堪腸断　唯有別離与死生

猶おもしろき勝人間去歟

○今日素麺をくふ事は十節記よりくむ喜

氏乃おなじ七月七日よりそ素麺を

病とやまむるれおなじ日よりそ素麺を

人こぞ日素麺をくへば瘧病をうれそ

○はたたなばたの御衣を

異澤よ感し関飲食色艶

肉経血を裏傷杜裏秋為

よく摸生せいとものづくりそうれ

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

日素麺を食ひたるぞと云ふ
うれしき事をまぬうるふ事なんや決して云ふ
なし世の人かゝる妄言を作ふへからす
○今夜二星を祭りて庭に立色の糸をつらぬる
香花をそなへ第一の女子
ちかき男女をよひ才能を
巧ふまり家宝を曝し書
ひろき世事日春ていふ
しよし云事根源よりこと
七夕星ふる雨乞祈
等乃為に祝ふ

て梶乃葉よりかくる
ちよの為しるしの歌撰集の事
乞巧奠乃事家財
又うれしき事なりとて婦人女の
なさゝ事をなすへからす
乃をとゝお事をいふへからす書籍
の用ふる事うや都
流感を懲鼻褌と
金気集よ紙用法師
七夕乃昔氏家とうたふ人なくなりぬるを

陰気愛う七夕の行ふ
天上銀漢如此夥。万家看数星秋深
多児戯。不独人間乞巧構

揚朴う七夕祓う

陸奥守 平忠度朝臣 人間五月会菖蒲
人間五月会菖蒲

○今日菓九と合せ麹と作てよもぎと同じ
たり此日皮袋と曝せり
又角蒿と取く毬襖書籍虫ばまず
お塾事歇よりて

十三日 二日より今日まで六日の間
梅雨と掃ひ塵埃を避けて
へ一元梅塵をたゝくよし
よく冬梅塵をはらふ
よくさ活事多くれいの梅雨なりひ月の日よりを
よく日なぐく降れそひてよし
○まゆ玉乃祝俊
るより酒市りかとおそ
もり世よりそまりん今乃世俗よとるる
なり花世りん多なきむをまつる今をりん人と

おろがうれしさのあまり後たうとく
○今夜世俗人々紙銭のまわりを燃し
つゐよゐ盂蘭盆会の事を書出すべし
士農工商たる人を問ず各其先祖の霊
まで皆家々にて祭礼をなすべし
かゝるよき事をなす人多くいわんや仏氏の教
そのうされい也雑組なる中元乃名を廃して
しまる人疑服をまとひ
楫櫂し船を漕て入来りて
乃線と名よばれる

かくれきてうたをうたひ又ハ
ゆきおもくふりつもりたる
さるハ寺 朱子のつくる韓文公廟の碑文
をよみて侍るまてさぶらひ
そのハ墓 ハ墓前よりつく
先祖代々の墓ありて
なきひとの墓へもつく
ありき 墓前にて
そのゝち寺うち
をそゝろありきして
ゆきてたのしむ

元宵 此夜より灯籠をかざり
ぬる七月十五日盂蘭盆
目蓮 盆灯籠 紙
多 盆の形 紙
ゆく方 ゆく方
やうに 又 盆
よふ 燃 富
て 失 と

より乃風俗となりやがて
源尾氏日蓮の事となり
水といふ書を作りて盂蘭盆乃供養
の年より始まりしよし
り事詳ならず
○五雑組よりそく七月朔日
毋鬼追出溝渠乃水
まく食ともるもの

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

十六日 陰 午の日男女こぞりて
奴婢ども
○今朝も雨降る 梅雨に
秋七月をとぶ 七月松
さと夜を月と
なり 奴婢ども
月と
晦日 晴
七月 秋
なり 風
風 肩傷
てこれを
七月 梅
と云 梅
かたまりて
又 ぬり
洗て 日
筈 入
入 桶
桶 入
ぬり
ぬり
ぬり

又楠の竹筒にて清水を汲入
板とを用ようべきなり其水
よく久鑒をして常に
やきに取かすれば
あふれ栓をさすまゐり
通る実床の垂れ動揺
天氣如何右件等の物漆
能一むら一紫法先蠟
ぬりおゝ数よ吹の大きく右紙
さ紙を重一又中の用

さく二遍目をよこよりひろげてあをうぎの紙
のたぐひをひさぐをひさごうりといふ又ひろ
ぐるまきをけと云ふくをよこよりとをして
つなぎ分ちてもとのごとくにひろぐるをよこ
ひろうりといふ又ひろげたるのち二遍ほどよこ
ひろうりをかさねてくるくると分合ひろげ
引てたばぐるまきにして紙をとりかへ
最後結合ひろげをよこよりとをして紙をとり
てよよりあげて紙をとりかへて
かのごとくにうちかへしてよこよりとをして
くくりて先もとのごとくにひろぐるをよこ
てたるのありさまを紙よりうりといふ又
引ておけばくるくるまきて

よりて宅中ことに菽蔓をとつくりて食なり
七八月の頃まで〳〵莢菽を出すこれもと
もやく育ぶれ大根みな〳〵七月初まで〳〵也莢菽
莢蔥を莢蔔と同時ことに宅中ことにつくり育てよく〳〵也それ根のみ
ならず葉をくなりてより初まで可なり大蔥小蔥ともに大蔥小蔥
とわりもう也小蔥は根とうの
八月の末まで皮と收むそれを橘と取なりこと去皮
と收日よ乾す
此月蓴と合ひおられをよりて場岩ひりこと雪す藥と

食ふの貝を採す廉蝮をそくふの氣をとうごりて蓼蕈
とくふの菲菜とやはりて食ふの人と傷る
實と食ふの氣をとうごりて息數と多く食ふの人と傷る
乱を多く生薑と多く食ふの人と暴寫
を採す立秋の後蕪菁幷及水渡餅と食多れ
立秋代後十日凡と多く食ふ次月冷廣義寒者
七月冥冥葵菁くふ次月冷水と多く呑ふりたひ
面時苦なくふも後日よ動りて病を生す又七八
月の頃節生冷の物果實多
を多く食と乱ふ邪の氣肉よ滞つまて癘病とう

七月乃古候申一通風玉秋の三候なり申
古秋の三候なり申酉乃季を申也
姫蕭申古禾乃登古雲れ三候なり
古秋昼五半古刻十分夜四半古刻十分
昼五半四刻十分夜四半古刻十分
朝日俗よ云秋よ云今日方乃
八月 八月の節秋分ハ八月乃中〇八月の異名 仲秋 雁来 雁信
橘素 桂月 観月 月夜 月見 月令廣義
〇八月乃季を月見と云事ハ
古昔乃人乃よくせしよ
のとて人よ招と遣ふ

事乃り古の根源よおそく云ふ事なし又
西籍古もおゝす世俗の風儀
萬葉乃昔乃人乃よくせしよ
年号
と称賛古多古ハ
とゝや又秀頌る大閤氏
張の天下に治布せるよ
時乃事なる人ゝ
て外戚通方に氏事に
さゝ
ゝ
ゝ

の物被れよまをそ
てそん侍りさんとて
えぬまゐく國史まを
侍給事根源乃
亟せりてそ申侍
ごとをは侍書をそん
をそうなぬる
御ふみを又今ひそ
とをふ史ふ田のまれ
さうまも八月朝臣
八月廿日中秋九十
月今度義潛確執書
なりと称乃奈れ
て歟書る事なし
○今日 禁裏より將軍家
よりも以勅使并
十四日 明夜乃法味
書之一 強明渡り
銀漢雲霄垂
宣旨黄明夜法味
十五日中秋と

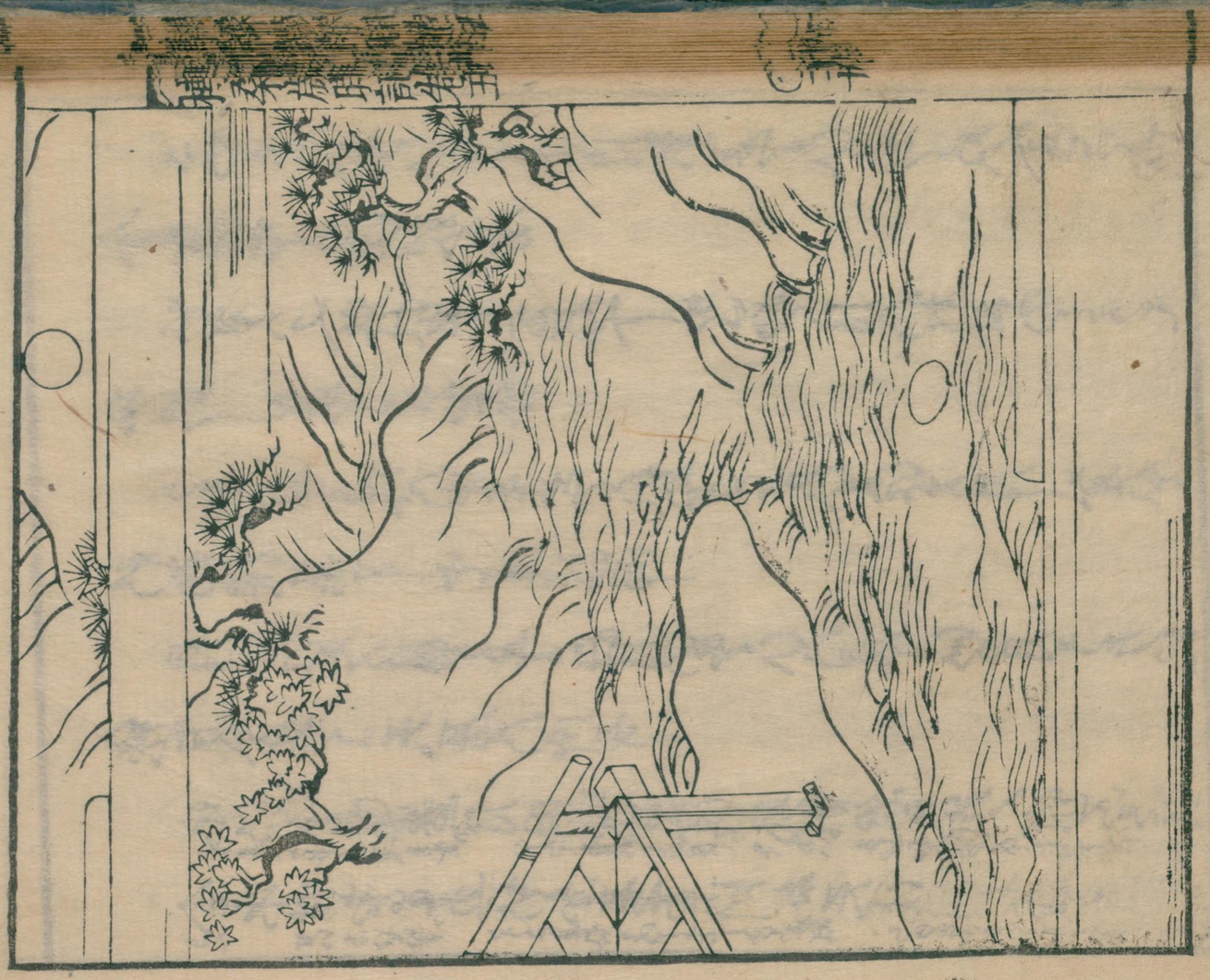
今日八幡宮八かくの放生会とて殊に事六人
宝字中四代元正天皇八神亀元年九月廿七日
日向国叛逆すこれ
八幡宮八筑紫幸給勝波豆来和軍を引率
彼国を征し事有先
八幡八託宣よし度の合戦多くれ人を殺しけ
有故筑紫宮とあがめ
いつとなくこれ絶ず
乃至ひけるとぞ 按葉記に
つゝしんで按ずるに八幡の御祭事いつ
ありけり

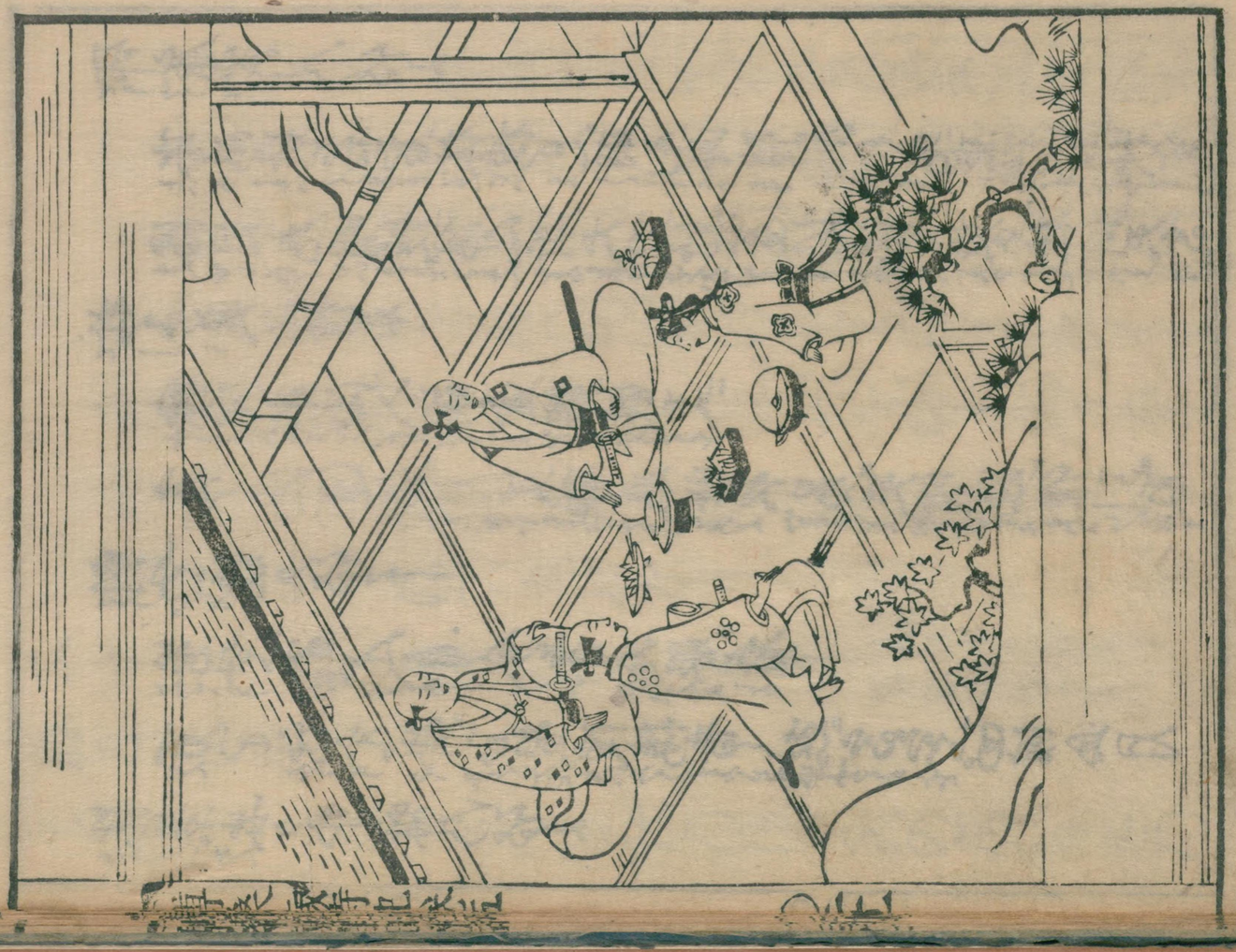
此事ありてくに
日本八月十五日放生
羅面部と号せり
世よりて年中の
○今宵も秋の月
ことに五夕ともいふ
林歌仙の発句
唐代世すり
古楽府よ螢惑乱
よりては此を

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

まやうのことはをとこ子を生ぬれば
牀の下に弄瓦と号して土の瓦を
玩ぶをもて祝とす又月餅を製してそのく
餅と合して看月会をもよほす月宮殿
歐陽詹観月詩序云月中有桂
分蒼白二種大樹高五百丈人
每伐之樹隨即合斧斤所及
於斯為甚又月中有蟾蜍
之中秋天気万里皎潔
塊不点纖埃仰観桂樹
入三五盈缺骨立疎疎
○事文類聚月歌云
○水性如玉

水性如玉の五行の本質
秋月団円の時に至て
彩雲捧集て中空清浄
うつくしき妹背ありて
物的集ると云事
○多の又妹背を題して
金気集ると淮南子
やうさいやひなとうと月氷と





ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

張景出り中秋の夜

万つ里秋空掛二玉鏡一 孤輪青し

皆是二別人一今宵冷眼看

劉禹錫競渡詩

夜く池辺伯月生 郡邑此秋易二天明一 酒催二詩興一

秋江水満二綉奩一 郎暁更

杜子美月詩

満月光明鏡懸レ空 大刀将二蓮子一 攀レ桂仰天宮

氷弦疑雲雷林棲見二羽毛一 此時膽白兎玉欲二数秋毫一

邵康節月詩

一年一度中秋夜 十度中秋九度陰 未満虧盈須二臾間一

都是明時好風月 何堪千里共嬋娟 今

○今按蜜栗と荷ハ花葉ともに秋ニ至てこのこと多し

月令廣義ニハ又いとく牡丹を栽る事

今日しては家毎ニ宜しく栽るべき根を漸く洗へ

酒をもとく洗へハ花妙なり

二十七日 孔子の生れ給ひし日なり 孔子生の秋の字ハ仲尼日月乃

晦日 沐浴

をろそまの社日をとく秋乃彼岸の中日 彼岸ハ秋ハ春ニ同し

祝ふ二月の朔より
祭をはじめ
始めて日月の金を
奴婢の犯をもの多し
ひとつの政をもてひとつの
秋は社皆れ参事なり
比丘尼の祈をもの
もろもろの濫犯多くいさゝや村里ご
ともの他郷みもの九月
なを饗餐の客多く
賛一ぶの産をや

年代書に一日を用ゐしと合せもの
なるべし文徳八九月古地の祈をもの時
などと製して事客餐一部
ひとりをもつて社日より
鎮守秋社仲社酒供
上旬の日を撰ぶ
婦分の日考妣先祖の祭
より後濫乱日して
もりて日夜ひとりを
乃至は古祈ひとり

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

月末に及び郊野に趣き観ること
十月家族打ち人を新穀を賞して祖
先を祭ること親戚を饗すること
十月陣風多き時人多く風邪に感じて寒熱
宅中老若上旬より萬蔓菁を
やく行ふ事なり十月に至れば
萬菖蒲葭を上旬の初商人
あらそひて売ること二月に
ありし霰に異ならず中秋の時雨ふる
知るべきなり元朔より

あつ汗いまだかさず土をうがちそれぞれ
しけきたるあり是をうつ次をこえうつ
べしそれを苗もとをそえ土をかけ
紅豆ともに収重ね桃花重ね
たるよりこと也四月より始めて
てとくとくし如此それ又瓜茄子のごとく
夏収重ね
熟したる栗と脳して後蒸して肉と剥きものとして収
重ね生ずるを蒸のあり
ね元来の和宅ようへてよう

さつま芋掘初

八月芋茎を採へし　なかき葉葵に似て八月採若
秋枝葉粗津洞地湯ゐ下布秋採宜晩春実葉各
異実熟迄　二百八十日乃都て
凡そ百八十日を経す

九月竹とれいは竹と云ふ　月令広義ニ竹と云ハ不断笹
なりく婦毛　元指向笹不断笹
みくやきその畑みく笹を
蔓菁雑乃庶汁よく洗ふ
漬しなを出すなら幹線栖矢薬木刀等も
八月ゟ摘乃雑と牧毛　布と用ひ絹布
と洗ひ紙と用ひ絹布

を薬毒をくるもの用多
九月天寒冷なり多く生果と食へ
生蕎雑ゟ解毒と食ゟ
月令広義ニ八月令
広義ニ乃ごとく重陽七籤
漬菜と牧事なりし人を
八月の古候ゟ一般廃毒ゟ
羞ゟ白露乃三候なり
穀掘戸ゟ古水妃酒ゟ
白露昼五十二刻十分秋分乃昼五十
刻夜五十刻十分秋分廃

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

九月 重陽 俗に九月の節句と云○九月の異名 季秋 菊月 なごし月 ながれゆく月 とも云○九月は暑さもうすらぎ秋の気もすゞしく
そろそろ冬ごもりの支度にかゝる月と云ふ意なり

朝日 今日より八日まで 袷衣 を着る

八日 沐浴

九日 重陽 と云 月と日と二つかさなりて 老陽 の数 九 重なる 故 重陽 と云 又 今日 菊の酒 を飲 邪気 を払ひ 寿 を保つ 事 有 二 故 と云 又 今日 餅 を食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗飯 を炊 て食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 酒 に菊の花 を浮 て飲 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を蒸 て食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を煮 て食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を焼 て食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を干 て食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を搗 て食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を粉 にして食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を団 にして食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を羹 にして食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を羮 にして食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を糕 にして食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を餅 にして食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を団子 にして食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を羊羹 にして食ふ 事 有 二 故 と云 又 今日 栗 を羊

死てもの房これと咲こと海の命よりもおもわりけ
より世人九日よりの毎よりこよ咲つて菊酒とのを
歸人菜黄嚢と名ん 俗に俚好あり
雑紀よりて九日菜黄と 五
費也房植菜よ実と酸ひきよのぎり菊花酒とのむ事
而菜雑紀よ厥実人の俗呼て九月九日茱萸
と食ひ菊花酒とのむ也共よりて九月九日茱萸俾
つり活よりて手向と云ふ俗よ婦女よりて
らびめもでよりて植菜よ婦
と引て必ず菜黄と
窮とよ九日よ二菊とかりて酒の気清
をはてもん冥ずりて
用ふる風也九月九日律也豺よ祭り獣よ

る方よ俗には日と
掩也元悪気と辟
とよりよ九人必
長寿のものむを
共よ菜にかぶ
ひく取おりてこれ
而菜雑紀よりえて
○五穀共ゆ人日と
菓すを実をる事也
去て満数よりこと

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

烏紗帽猫侍の夏風満眼愁

趙翁月の九日の待

屐歯聴雛印波汲二三客上磐偸人世翁遥
催黄菊満園香九日待

杜牧り九日毎に宝玩の待ル

江潮秋到屋上磐偸人世翁遥
年に笑ふ翁再陵摘蔵
五周宝と怨着晩。古法今来只如此
猫泊老

○今日蔓紹甲斐守

十日 四佰今日より是秋と

いふ〳〵より三まる雑煮

十三日 維佰今晩月如昼

蔓ゐる秋ふ月十三日ハ婆宮参り供営

清明なる方ま月を賀ふ良若ですや又ふ参れ

ともし祝紀おもとも

又月ふ大小ふ当いちがう

ふ月と貴もろ酒もり中旅をまろうます月と考す

ふ佳節と廿り我園ふ又九月十三夜と月ふ賞

くれの睦月のとくまたねをもまたそちらけの那
須表通 号法性寺殿 九月十三夜歌月待よ
脚脇寂く月お陳濃
濃雪殊勝家蒼徑潜 雲翳十二夜新勝於古教
百年完了 春今猶傍 温昔兄清明 要價千金

脇日 沐浩

ひ月部越て無塵と春へ
上旬小雪とうへ下旬に大雪を降へ
交變とう春四時の氣とうこと月令廣義にう
況肥饒なる所をまくうゆきい甚繁志くふへ

十月乙夜十二月初まぐくへ
元葉とこ落て九月ゆおよ取りれいひ月に就へ十月の後
探るものい淺就てようと
交昧ろ葉ハ日に就へ久しまとる葉ハ漸半ます
ろり但紫藤落葉林ろ毛木とい久へく短日
小方せい氣うとくなるかそうろ母そやく收て
淺よ平へ

ひ月特丹苞葉及竹筠果本とうへ楚てようと月
令廣義ニ方そへう農設全書よやくろ果実とう
ゆふ乞先九月乃中比後楙のまりとなりて繩と

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

いくまいりとめくりけりたうふ
一吹 年五二月ヨリ梅雨ノ
比ニ至ル
比月粟を收蓄へ一月今慶義ニいそく粟を
取收置へし月ニ入そうくうのと去日かり一海と
炒そく冷し新壺ニ入汰一重粟一重
また一二百入ゟ多きハ竹葉を地ひそと
を竹葉あそくなるを地おそくてなれ
いなり底ニ大れ壺をとうむきたり酒ニまたう
づくるなれ又塩ゟ一二粒漬
胡麻を神世粟ニ入重へしもそ又塩ゟ
山中乃老人の

好ゟ生粟と二百日ゟかり後熟ゟ又月
壺ニ收ゟそ三ツ重ハ出くるて味ハ
又大粟とまぶく貯一重ニ粟ハ
やきうとあて壺ニ入ゟ
用ニ一重ニ粟ハ出ゟ
ふたあさうニなへにの方と地ニ芽
ませす久へくこてあり
用ようづ重くもよし
ハ白米殻と米粉へ一用多し
此月薑と食ゟなれ痼疾ニ

839
7
87

俗に是を指す麥と云ふ雑と食ふ事多く食へば大肉となる人の体質と倶に生ずる物と云ひて痢疾を治すと

月令廣義夏之部

叢書第二巻

九月の土候第一鴻鴈来賓第二雀入大水爲蛤第三菊有黄華第四豺乃祭獣第五候蟄蟲咸俯第六水始涸第七鴻鴈来賓第二候雀入大水爲蛤第三候菊有黄華第四候豺乃祭獣第五候蟄蟲咸俯第六候水始涸第七候

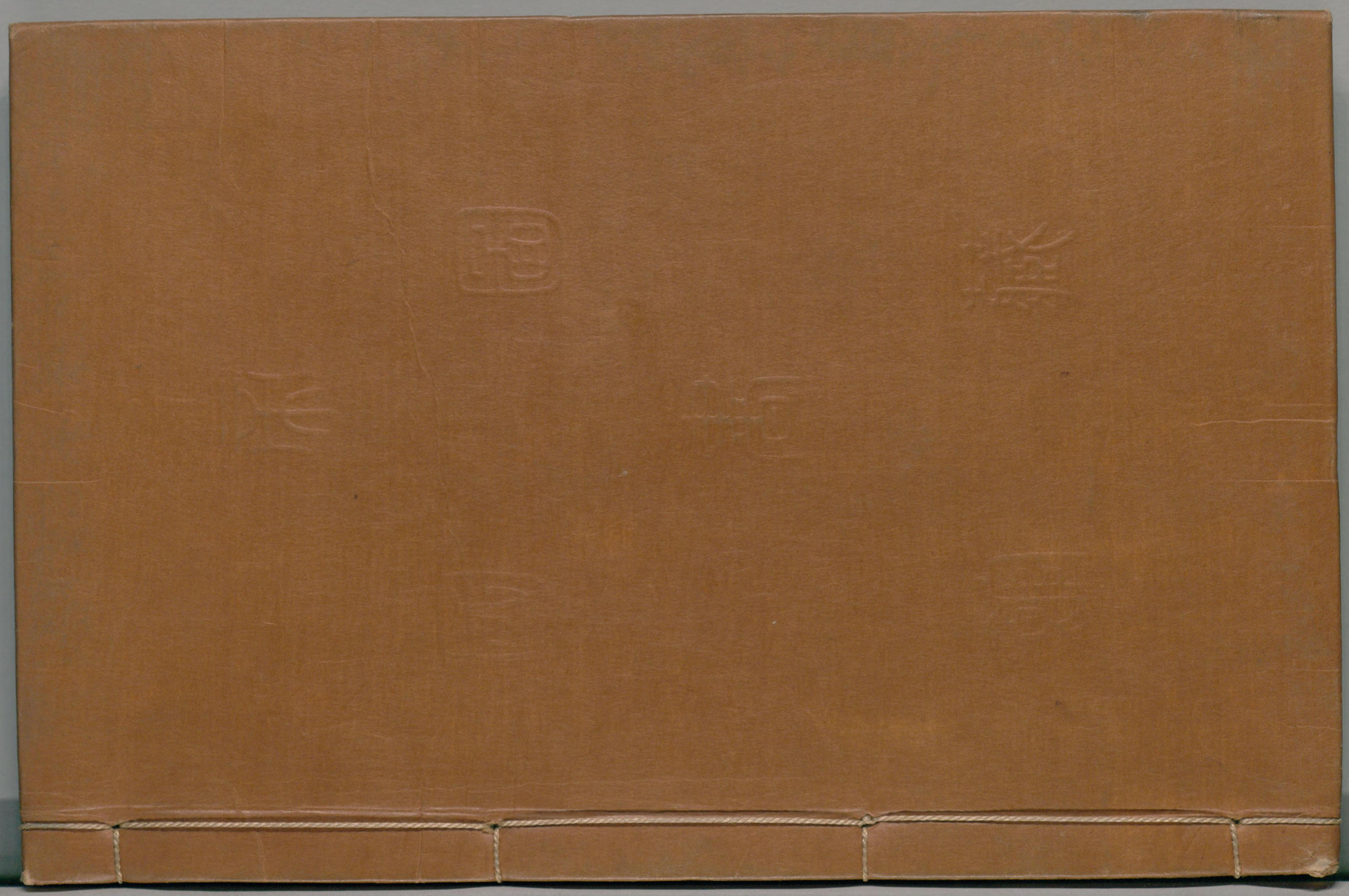
月令廣義

日本歳時記巻之五竟

839
7
87

国立国会図書館　　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用



ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87